

聖書ヘブライ語動詞bw' , hlkの意味考察

大里, 泰弘

<https://doi.org/10.15017/2332607>

出版情報 : 文学研究. 85, pp.151-172, 1988-02-29. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



聖書ヘブライ語動詞 bw', hlk の意味考察

大 里 泰 弘

0.

小論では旧約聖書を資料として⁽¹⁾ 聖書ヘブライ語（以下、単にヘブライ語と呼ぶ）の動詞 bw', hlk について若干の意味考察を試みる。この二つの動詞は、

- (1) 創16:8⁽²⁾ あなたはどこから来て (bw'), どこへ行こう (hlk) としているのか。

where have you come from and where are you going?

Woher kommst du? Wohin gehst du?

d'où viens-tu et où vas tu?

- (2) 士19:17 どちらにおいて(hlk)になりますか。どちらからおいで(bw')になりましたか。

... and asked him where he was going and where he came from.

Woher kommst du? Wohin gehst du?

Où vas-tu, et d'où viens-tu?

のように用いられ、日本語、英語、独語、仏語の来ル・行ク, come・go, kommen・gehen, venir・aller に相当する動詞であると考えられる。これらは互いに異なる体系に属しているのだから意義素が異なるのは当然だが、何がしかの対応が認められ比較対照が可能なのは同じ概念分野をそれぞれがカバーしているからである。

これらの動詞は基本的には、走ル, run, laufen, courir などと違って、伝

達時（あるいは言及時）での話し手・聞き手の位置との関連で使用が条件付けられるという deictic な特性を有している。

(3) ここに來い/*行け⁽³⁾

(4) Come/*Go here !

(5) Komm/*Geh her !

(6) Viens/*Va ici !

deixis は談話文脈の觀察を抜きにしては論ずることのできない研究対象であり、母語話者の内省觀察は最も望ましい研究方法である。拙論ではこの手段を直接利用することは不可能であるから、來ル・行クなどについて大江(1975)や久野(1978)が行った形での分析は行えない。接近方法は言語文脈の觀察・「言葉の脈絡」の觀察に限られる。とはいえ、脈絡の意味が具体的場面に即した談話文脈の意味に近い準具体的なものを提供してくれるはずである⁽⁴⁾。また bw', hlk とともに使用度数の多い基本単語である⁽⁵⁾ことも文献語を扱う上には好都合である。

尚、拙論では旧約聖書という定められた言語資料を一体系と仮定し、通時的考察には立ち入らない。(この辺の事情については松田(1972)を参照)。

1.

Brown et al. の辞書⁽⁶⁾は bw'の項で come in, come, go in, go, hlk の項で go, come, walk という語義をまず示し、細分して前置詞や名詞と統合した用例を挙げ訳語を与えている。両者に come, go の訳語が見えるし、また

(7) 出14:16 *wjb'w bnj-jšr'l btwk hjm bjbšh*

(15主⁽⁷⁾はモーセに言われた。)イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることが出来る。(bw')

(8) 出14:22 *wjb'w bnj-jšr'l btwk hjm bjbšh*

イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き... (bw')

(9) 出14:29 *wbnj-jšr'l hlkw bjbšh btwk hjm*

イスラエルの人々は海の乾いた所を進んだが... (hlk)

のようにほぼ同じ言語文脈で用いられることもある。しかし、「一つの言語で音形が異なる単語は意義素も異なる」という原則からして二者の使い分けの条件を求めることができる筈である。

2.

まず本考察において必要な概念を導入しておこう。

(i) 旧約聖書という一種の文学作品を資料とし deixis の研究を行うのであるから、書き手（あるいは語り手）の「共感 (Empathy) 度」⁽⁸⁾は無視することのできない概念である。

- (10) エレ 1 : 1 エレミヤの言葉。彼はベニヤミンの地のアナトトの祭司
ヒルキヤの子であった。... 4 主の言葉がわたし (エレミヤ) に臨ん
だ。5 「わたし(主)はあなた (エレミヤ) を母の胎内に造る前から
あなたを知っていた。...」

文中の名詞句の x 指示対象に対する書き手の自己同一視化の度合 (共感度) を $E(x)$ で表すと、(10)においては、エレ 1 : 1 は $E(\text{エレミヤ}) = 0$ (客観描写)、4 は $E(\text{エレミヤ}) = 1$ (完全な同一視化)、5 は $E(\text{主}) = 1$ と解される。厳密には、5 では、4 でエレミヤに同一視化した書き手がさらにエレミヤの目を通して主に同一視化したと考えられる。このような場合を推移的共感 (Transitive Empathy) とでも呼ぼう。 $E(x)$ と他の共感度との大小関係 ($E(x) > E(y)$ など) を書き手の x に対する「視点」と呼ぶ。

deictic な動きの動詞は「わたしとあなた」の軸を出発点として研究するのが妥当であろう。そこで考察の対象をとりあえず '動きの主体が 1・2 人称の場合' 等の話し手の位置が関与するものに限定する。従って(7), (8), (9)や

- (11) 創 26 : 1 wjlk jšhq 'l·bjmlk

イサクは ... ペリシテ人の王アビメレクのところへ行った。(hlk)

- (12) サム上 23 : 18 wjhwntn hlk lbjtw

(ダビデはホレシヤに残り,) ヨナタンは自分の館に帰って行った。

(hlk)

(13) サム上23:27 wml'k b' 'l-š'wl

そのとき、使者がサウルのもとに来て、(bw')

などの pure third-person discourse ⁽⁹⁾ には重点を置かない。登場人物の間の Speaker-Addressee deixis は関与的でないからである。動きの主体が3人称であっても(14)などは対象となる。

(14) ヨシ2:4 kn b'w 'lj h'nšjm ... 5 ... l' jd'tj 'nh hlkw

4 確かに、その人たちはわたしのところに来ましたが、...5...どこへ行ったのか分かりません。

(ii) 「come, go が表すある人またはものの動きがかかわる二つの点が「出発点」と「到達点」であり、動く人またはものが出発点を離れる時、到達点に到着する時がそれぞれ「出発時」「到着時」である。また、come, go を含む文を発する伝達行為があり、その伝達行為に参加する当事者「話し手」と「聞き手」がいる。伝達行為の生ずる時が「伝達時」である。」(大江、上掲書 p. 13) という概念を bw', hlk の考察に適用する。

(15) 創7:1 主はノアに言われた。「さあ、あなたとあなたの家族は皆、箱舟に入り (bw') なさい。...」

(16) 詩101:2 いつ、あなたはわたしを訪れて (bw') くださるのでしょうか。

ここで「伝達時」とは(15)では登場人物(話し手と聞き手)の間の発話時点を、(16)では書き手と読み手の伝達行為が生じた時を指す。

3.

Fillmore (1972) によれば、come には Goal (到達点) -oriented, go には Source (出発点) -oriented もしくは Neutral (出発点・到達点に関して中立的) という特性が認められるという。

- (17) He came home at midnight. [Goal-oriented]
- (18) He went home at midnight. [Source-oriented]
- (19) He went from Vancouver to Hawaii last week. [Neutral]

Source-oriented な動詞は出発点が既知の情報である文脈で使用されるのが普通である。日本語でも例えば、小説の書き出しで

- (20) 「あなたはどこから来たの」と先生は陽子に尋ねた。
- (21) 陽子が行ったのは三日前の事だった。

のような文があったとする。(20)では'出発点未知・話し手の位置=到達点', (21)では'到達点未知・話し手の位置=出発点'であることが分かる。ちなみに、出発点が話し手の位置以外でかつ未知である

- (22) 「あなたはどこから行ったの」と先生は陽子に尋ねた。

という文では書き始めにくいであろう。書き出しの部分では書き手あるいは最初に導入された登場人物などの場所以外に前提となるべきものがないのだから。

ヘブライ語に目を転じると、m'jn・'j mzh 《どこから, woher》と統合した例はbw'に限られている。

○ m'jn

- (23) 創42：7 おまえたちはどこからやって来たのか
- (24) ヨシ9：8 どこから来た
- (25) 士17：9 19：17 どちらからおいでに
- (26) 列下20：14 イザ39：3 (あの人々は)どこから訪ねて来たのですか
- (27) ヨナ1：8 どこから来た
- (28) 詩121：1 わたしの助けはどこから来る
- (29) ヨブ1：7 おまえはどこから来た
- (30) ヨブ28：20 では、知恵はどこから来る

○ 'j mzh

- (31) 創16：8 あなたはどこから来て

(32) サム下 1 : 3 どこから来たのだ

(33) ヨブ 2 : 2 おまえはどこから来た

[-sentient] の主語を持つやや比喩的な(28), (30)を含めてすべて話し手の位置への移動を表している。この二つの例と(26)の外は動きの主体は 2 人称。'3 人称主語・到達点=あなた'である(26)とても話し手は聞き手と同じ場所にいるコンテキストなので例外ではない。

次に到達点が未知である際に用いられる 'nh 《どこへ, wohin》と bw', hlk の統合を調べてみよう。hlk と共起した例は

(34) 創 16 : 8 32 : 18 どこへ行くのか

(35) ヨシ 2 : 4 その人たちはわたしのところに来ましたが...5 日が暮れて城門が閉まるころ、その人たちは出て行きましたが、どこへ行ったのか分かりません。

(36) 士 19 : 17 どちらにおいでになりますか

(37) 列上 2 : 42 どこであれ出て行けば、その日に死なねばならないと心得よ

(38) 列下 5 : 25 僕 [であるわたし] はどこにも行っていません

(39) ゼカ 2 : 6 あなたはどこに行かれるのですか

(40) 詩 139 : 7 どこに行けばあなたの霊から離れることができよう

(41) 雅 6 : 1 あなたの恋人はどこに行ってしまったの

(42) ネヘ 2 : 16 役人たちは、わたしがどこに行き、何をしたか知らなかった。

予想されるように 'nh と hlk の共起性が高いと思われるが、'nh と bw' が統合した例が一つある。

(43) 創 37 : 30 w'nj 'nh 'nj b'

わたしは、このわたしは、どうしたらいいのか。

Where can I go?

Wie soll ich das verantworten?

Et moi, où irai-je?

これは「わたしはどうしたらいいのか」という訳にも伺えるように途方に暮れた人の感情を表出するのに用いられた修辭的な文である。(THAT, p. 126 参照)。絶望の底にあっても確固とした信頼に貫かれていると考えればこの bw' には肯定的期待が込められていると牽強付会的に推理することもできる。

(44) He came/*went back to his senses.

(45) He went/*came out of his mind.

のように evaluative-viewpoint で見た come に一脈通ずるのである。¹⁰⁾

いずれにしろこの例は破格的用法と考えられる。Goal-oriented の動詞が到達点が未知の情報である場合に出現するというのは想像に難い。佐賀方言¹¹⁾では、電話で、話し手が聞き手の場所に行くことを伝える時に(到達点既知)、行くだけでなく、

(46) いまからわいがとけ来っけんね

'今からおまえのところに行くからね'

と来ルも使用される。しかし、聞き手と会うという前提があっても、待ち合わせ場所を訪ねる時には(到達点未知)、

(47) どけ行くぎよかとかにや

'どこに行けばいいのかな'

と言って来ルは使えない。

以上, m'jn · 'j mzh 《どこから》, 'nh 《どこへ》と bw', hlk の統合を調べただけでも前者に [Goal-oriented], 後者に [Source-oriented] という特徴が認められるのではないかとの見通しが立つ。

4.

次に運動の方向を表す前置詞 'l 《to》に人称接辞の付いた 'lj 《to me》, 'ljk 《to you》などとの統合例を調べる。

(i) 予想される通り、話し手の位置方向を示す 'lj 《to me》, 'ljnw 《to us》

と結び付くのは圧倒的に *bw'* が多い。*bw' 'lj* 《come to me》 の例は《同衾スル》、《攻撃スル》という慣用表現を含めて

(48) 創26:27 *mdw' b'tm 'lj*

あなたたちは... なぜここに来たのですか

をはじめ28例。(他に創38:16, 39:14・17, 43:23, 45:18, 46:31, 出3:9, 18:15・16 ヨシ2:4, 18:4 士11:7・12, 13:6・10 サム上17:43・45 サム下6:9 列上17:18 列下5:8, 10:6 エレ32:8, 49:4 エゼ14:1, 33:21・22 詩101:2)。*'ljnw* の例は

(49) 創42:21 *'l-kn b'h 'ljnw hsrh hz't*

それで、この苦しみが我々にふりかかった。

を含め5例。(民32:19 士13:8 列下4:10 ネへ5:17)。*hlk* が *'lj* と共起しているのは次の4例と少ない。(*'ljnw* との統合例はない)。

(50) 民22:16 *'l-n' tmn' mhlk 'lj*

どうかわたしのところに来るのを拒まないでください。

(51) 民22:37 *lmh l'-hlkt 'lj*

どうして来られなかったのですか。

(52) サム上17:44 *lkh 'lj*

さあ来い。(お前の肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう。)

(53) イザ55:3 *h'tw 'znkm wlkw 'lj šm'w*

耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。

(52), (53)は辞書の記述に言う一種の慣用表現である⁽¹²⁾。(50), (51)では伝達時あるいは言及時(time of reference)⁽¹³⁾において、動きの主体が話し手の位置に到着していない(irrealis)。*bw'* が使われた場合でも未来のことを述べる際には(1人称以外の)動きの主体は伝達時(言及時)に到達点にはいないことは明らかである。(例えば創45:18)。しかし、話し手は[Goal-oriented]な*bw'*を使うことによってその到着を”確かなもの”と考えているのだろう。伝達時にはirrealisであることが伺える、創45:18, ヨシ18:4, 列下5:8, 列下10:

6でも問題にした到着が後に実現している。ここで hlk が出現する民数記22章の脈絡を眺めてみよう。モアブにやって来たイスラエルの人々に恐れをなしたモアブ王バラクはベトルに住むバラムを招いて彼にイスラエルの民を呪って欲しい、という思いを抱いた。彼はバラムに使者を送ったが彼は出立せず(バラムの出立は神の意に反することであった)、バラクが再び使者を遣わして言わせしめたのが(50)である。バラクのもとへと出発したバラムであるが、途中主の御使いの妨げを受け目を開かれ「わたしの間違いでした。…意に反するのですしたら引き返します。」(34節)と言う。結局、彼は「ただ神が授けられた言葉のみを告げる」という契約のもとにバラクの所へ到着する。(51)はバラクがやっと到着したバラムに語っているところである。バラムの到着は実現しているから日本語からの類推では bw' が予想されるところである。この二例は「わたしの要請に拘わらずどうしてあなたは重い腰を上げずにいたのですか」というバラクのいらだちを表していると考えられる。すなわちバラムが出発点を立つこと(“起動”)に重点があるのだ¹⁴⁾。しかも、事態はバラクの思惑どおりには“実現”しなかったのである。到着はしたものの、この後、バラクの期待に反し(神の意にしたがって)バラムはイスラエルを祝福する(23章)。

(ii) 聞き手の位置方向を表す 'ljkm 《to you》, 'l(j)km 《to you(pl.)》との結び付きを見てみよう。

bw' と共起した例は

(54) 出20:24 'bw' 'ljkm wbrktjk

わたしはあなたに臨み (bw'), あなたを祝福する

をはじめ34例(うち 'ljkm が一例)。(創6:20, 19:5, 38:16, 47:5 48:2・5 出18:6, 19:9, 民22:38 申13:3 ヨシ2:3 士6:18 サム上10:8, 17:45 サム下3:24 列下5:6, 9:11, 10:2 ('ljkm), 20:14 イザ39:3 エレ2:31, 16:19, 32:7, 38:25 エゼ7:7, 16:33, 24:26, 33:31 ヨナ2:8 詩102:2 ヨブ4:5 ダニ10:20 歴上19:3)。

hlk の例は次例のみ。

(55) ヨシ 9 : 12 bjwm š'tnw l^lkt 'ljkm

御覧下さい。これがわたしたちのパンです。ここに来よう (hlk) と
出発した日に、食糧として家から携え出たときにはまだ温かったの
が、今はすっかり干からびてぼろぼろです。

ここは、ヒビ人がヨシュアのもとにやって来て会話を交わしている場面である。「ここに来ようと出発した日に」とあり、やはり出発点での「起動」に焦点を当てたと思われる。

ちなみに、'Die Lexika gliedern nach den beiden Hauptbedeutungen
>hineingehen《 (Oppositum → js' >hinausgehen《) und >kommen《
(Oppositum → hlk >gehen《) und schließen seltenere Bedeutungen
(《 gehen 《, >zurückkommen《 usw.) mitsamt allerlei Redewendungen an.'
と THAT (p. 266) にあるように、bw' は js' と対義関係にある。

(56) 詩121 : 8 jhwh jšmr-š'tk w^bw'k

あなたの入ると出るを見守られるであろう (1955年改訳版)

The Lord will guard your going and your coming

この場合 hlk と対義関係にある時に重要な deictic な要素は前面に出てこない。'ある場所への出入り' が有意義なのである。js' との関係において bw' はすぐれて [illative]/ [ablative] だと言えよう。(js' = [allative]/ [elative])。無論、二つの対義関係が直截的に区別される訳ではない。

(iii) 第三者の位置方向を示す 'ljw 《to him》, 'ljh 《to her》, 'l(j)hm 《to them》 との統合は pure third-person discourse を除くと 4 例。さらにそのうちサム下12 : 23, サム下17 : 12はそれぞれ《死ヌ》(hlk), 《攻撃スル》(bw') の意味の慣用的な用法である。基本的な用法は次の二例と考えてよからう。

(57) サム上28 : 7 w'lk^h 'ljh w'dršh-bh

サウルは家臣に命令した。「口寄せのできる女を探してくれ。その女のところに行って尋ねよう。」 (hlk)

I will go and inquire through her.

Ich will hingehen und sehen...

j'irai l'interroger...

(58) 列下4:23 mdw' 'tj hlk'tj 'ljw

どうして、今日その人のもとに行くのか。(hlk)

Why go to him today?

Warum gehst du ausgerechnet heute?

Pourquoi vas-tu aujourd'hui chez lui?

ここで動きの主体は1人称(57), 2人称(58)である。日本語でも、第三者の場所への移動を表現する時は、話し手・聞き手が共に出発時に出発点にいる場合(comitative), 到達時に両者が到着点にいるという前提がない場合には、来ルは使えず行くしか用いることはできない。上例は行クの代わりに来ルを使って訳すことの出来ない状況設定である。つぶさには調査していないがヘブライ語には

(59) 申26:2 whlkt 'l-hmqwm... 3 wb't 'l-hkhn...

2 あなたの神、主が与えられる土地から取れるあらゆる地の実りの初物を取って籠に入れ、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所に行きなさい (hlk)。3 あなたは、そのとき任に就いている祭司のもとに行き (bw'), 「今日、わたしはあなたの神、主の御前に報告いたします。...」と言いなさい。

といったように '動きの主体が2人称・第三者の位置への移動、をbw' で表した用例もある。(57), (58)と違い(59)の行ク (bw') に替えて来ルを使用することも不可能ではない。いずれにしろ、条文的色彩の濃い文脈であるから純物語的な文脈とは異なり時間の流れやその文脈、場面に関与的時点、話し手と聞き手の位置関係ということはそれほど有意義ではないと考えられる。条文的文脈では書き手(話し手)は比較的自由に視点を選択できるのだろう。

方向を表す副詞と bw', hlk との統合例を調べる。

(60) 創42:15 いちばん末の弟を、ここに来させよ

(62) 士16:2 「サムソンが(ここに)来た」との知らせを受けると

と思い、ダビデに言った。「お前はここに入れまい (bw' hnh)」

(65) 列下 8 : 7 神の人がここに来た

(66) 歴上11：5 お前はここには入れまい

(67) サム上10:22 その人はここに来ているのですか (hlm)

(69) ヨブ38:11 ここまでは来てもよいが越えてはならない (ph)

(70) サム上 2 : 14 lkl-jšr'l hb'jm šm bšlh

162

○ šm

- (71) 申1:37 あなたもそこに入る (bw') ことはできない
 (72) サム上9:6 ちょうどこの町に神の人がおられます。...その方を訪ねて (hlk) みましょう。

○ šmh

- (73) 創19:22 あなたがあの方に着く (bw') までは、わたしは何も行わないから
 (74) 出10:26 そこに着く (bw') までは、我々自身どれをもって主に仕えるべきか...
 (75) 申1:38・39 そこに入る (bw') ことが出来る
 (76) 申12:5 主のすまいを尋ね、そこへ行き (bw') なさい
 (77) 申32:52 そこに入る (bw') ことはできない
 (78) 列下9:1 ラモト・ギレアドに行き (hlk) なさい。2 そこに着いた (bw') ら、...
 (79) イザ7:24 人は弓矢を持ってそこへ行かねばならない (bw')
 (80) イザ7:25 人は...足を踏みいれず (bw')
 (81) エレ40:4 目の前に広がっているこのすべての土地を見て、あなたが良しと思い、正しいとするとところへ行くがよい (hlk)

以上の šm, šmh は第三者の位置を指示している。(81)では到達点が明確に定まっていないがために [Goal-oriented] な bw' ではなく hlk が使用されたと考えられる。先に触れたことであるが、日本語では動きの主体が1人称か2人称であるかに拘わらず話し手と聞き手両者が到着時に到達点にいるという場合(厳密には、両者の出発時も違ってはいなければならない)を除いて第三者の位置への移動を表現する際には行くしか出現しない。上の例では bw' の用いられた例に來ルという訳語を与えることはできない。即ち、日本語や英語の対応する語では話し手・聞き手の位置関係が主たる使用条件であるのに対し、ヘブライ語 bw', hlk の使い分けは動きの主体の人称に関係なく到達点が

既知である場合には [Goal-oriented] か否かというアスペクト的な基準によって決定されると思われる。(77)にその特徴がよくうかがえるjs' 《hinausgehen》との対義関係における '場所の出入り' という場合には当該動詞の使用に先立って前提となる既知の場所があるはずである。bw' の[illative] (↔js') と [Goal-oriented (egressive)] (↔ hlk) という特徴をより抽象的に [terminative] とでも表そう。

ついでながら mšm 《from there》, mzh 《from here》との統合も調べておこう。pure third-person disocouse を除くとそれぞれ一例がある。

(82) アモ 6 : 2 カルネに赴いて、よく見よ。そこから、ハマト・ラバに行き (hlk msm) ...

(83) 列上17 : 3 ここを去り (hlk mzh), 東に向かい...

hlk が現れており [Source-oriented] の特徴を仮定することを裏付けるものである。

6.

久野は日本語の来ル・行クの使い分けについて次の制約を挙げている。

(84) 「来ル・行ク」の視点制約

a. 話し手が動く主体である場合

発話場所が到達点であれば「来ル」、出発点であれば「行ク」が用いられる。

b. 話し手が動く主体でない場合

「来ル」 発話の時点、或いは動きの動作の起きる(起きた)時点に到達点にいる(いた)(動きの主体以外の)人に話し手の視点が接近している時用いられる。

E (到着点側の人) > E (動きの主体, 出発点側の人)

「行ク」 その他の場合に用いられる。

E (動きの主体, 出発点側の人) ≥ E (到達点側の人)

久野 (上揚書, pp. 253-254)

この制約に鑑みてヘブライ語の bw' と hlk の使い分けを検討してみよう。

(i) 動きの主体が一人称の時

(i a) 自立人称代名詞 'nj, 'nkj 《I》, 'nhnw 《we》 が明示された bw', hlk の用例は36例あり, うち hlk の例が22ある。《死ヌ》, hlk 'm~(b)qrj 《resist against》 等の比喩的用法は捨象する。

明らかに発話場所が「出発点」であると考えられるものは,

- (85) 創22: 5 おまえたちは, ... ここで待っていなさい。わたしと息子はあそこへ行行って (hlk), ... また戻って来る。
- (86) 出3: 11 わたしは何者でしょう。どうしてファラオのもとに行き (hlk), イスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。
- (87) 士1: 3 わたしも一緒に行きます
- (88) サム下15: 20 わたしは行ける所へ行くだけだ
- (89) 列上18: 12 しかし, わたしがあなたを離れれば (hlk)
- (90) ルツ1: 21 出て行くときは (hlk), 満たされていたわたしを主はうつろにして帰らせたのです。

《歩く》と訳されるような [Neutral] という特徴の顕現したものに次の例がある。

- (91) 創24: 42 わたしがたどってきた (hlk) この旅の目的を
- (92) 創28: 20 わたしが歩む (hlk) この旅路を
- (93) 士17: 9 適当な寄留地を求めて歩いて (hlk) いるのです
- (94) 士18: 5 我々の進めている (hlk) 旅が
- (95) イザ45: 2 わたしはあなたの前を行き, 山々を平らにし
- (96) ミカ4: 5 とこしへに我らの神, 主の御名によって歩む (hlk)
- (97) 詩26: 1・11 わたしは完全な道を歩く (hlk)

やはりこれらと同じような例である

(98) 士19:18 わたしたちは、ユダのベツレヘムからエフライム山地の奥にあるわたしの郷里まで、旅をしているところです。ユダのベツレヘムに行つて (hlk)、今、主の神殿に帰る (hlk) 途中ですが、...で、発話場所は問題となっている移動の出発点でも到達点でもない。この hlk を来ルで訳すことはできない。(84)の a の後半部は、精確には、'発話場所が到達点以外であれば「行ク」'となるべきである。ヘブライ語では、話し手又は聞き手が動く主体で発話場所が到達点の場合にも hlk が使用された例が少例ながらあった。(50, 51, 55)。ほぼ明らかになったようにその場合はどの相(始動相か終結相)に注目するかによって使い分けがなされている。

(i b) 自立一人称代名詞が明示された bw' の用例で、発話場所が到達点であるものは(《攻め込む》等の慣用表現は捨象する)

(99) 出18:6 わたし、エトロが...二人の子供を連れて来た。

(100) サム上4:16 わたしは戦場から戻つて来た者です。

(101) ダニ9:23 お前が嘆き祈り始めた時、御言葉が出されたので、それを告げに来た (bw')。お前は愛されている者なのだ。

(102) ダニ10:12 ...お前のことばのためにわたしは来た。

ここで留意すべきは、日本語の来ルと違って bw' は発話場所が到達点の場合のみならず、出発点の時にも使用されることである。

(103) 創37:10 一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしも...お前の前に行つて (bw')、地面にひれ伏すというのか。

(104) 出3:13 わたしは、今、イスラエルの人々の所へ参ります。(bw')。

(105) 詩5:8 しかしわたしは、深い慈しみをいただいてあなた(主)の家に入り (bw')

英語 come のような到着時に話し手が到達点にいることを先取りした表現法である。(この場合も話し手・聞き手が共に到着時に到達点にいる)。日本語佐賀方言の例(46)も参照。ここで最も興味深い点は(86)出3:11の hlk と(104)出3:13の bw' の比較である。

(106) 出3:11 モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き (hlk), しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。12 神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。…」13 モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります (bw')。…」

この脈絡はイスラエルの指導者として神に召命されたモーセが最初は迷い躊躇した(出3:11 hlk)ものの神の摂理に余儀なくされて自己という観念を脱して全霊を神に委ねようと決意した(出3:13 bw')ことを表している。

(エレ1:4~8参照)。(106)だけからは聞き手(この場合神)が到着時に到達点にいるかどうかは定かでないが、出3:12(エレ1:8, 詩139:8等参照)より聞き手(神)は到着時に確かに到達点に存在するのである。これは(43)創37:30の牽強付会な解釈にもいくばくかの妥当性を与える。信仰が未完了を完了に変えたと解しうる。また、このbw'とhlkの用法の差異は古典アラビア語などに見られる完了/未完了 (realis/irrealis) の対立に並行的な現象とも考えられる。

[完了/未完了の対立は]時間的前後関係の対立ではなく、文脈ないし場面の示す関与の時点以前において完結した事象とみなすか否かの対立と考えられる。例: ḡalasat tanzuru 'ilayhi 《(逐語訳) 彼女は座った・彼女は眺める・彼のほうを→彼を眺めながら彼女は座った。》。行為は客観的に実現していなくても表現者の脳裏において完結していれば完了形で表現される。例: ḥalaftu wa-l-laahi laa fa'altu haadaa 《私は誓った・アッラーにかけて・私はしなかった・これを→わたしは決してこんなことをしない》。表現者が完結したと見なししていなければ、過去の出来事でも未完了形で表現される。例: limaa taqtuluuna 'anabiyaa 'al-laahi min qablu 《何故おまえらは以前にアッラーの預言者たちを殺し(続け)

たのか》。⁽¹⁵⁾

(ii) 動きの主体が二人称の時

(ii a) まず bw' の用法を見てみよう。

4 (iii)で触れたが、日本語では来ルを用いて第三者の位置への移動を表す場合には話し手・聞き手の両者が共に到着時に到達点にいることが前提でなければならない。

(00) 三時にまたあそこに来てください

では、発話場所は到達点以外であり到着時に話し手と聞き手が到達点にいることが心理的にせよ実現しなければならない。

ヘブライ語では話し手が到着時に到達点にいない場合にも bw' が使われることがある。以下の例はそうした状況設定での発話である。これらの脈絡では来ルという訳語を与えるのは不自然である。

(00) サム上10：1 [サムエルはサウルに言った] 2 今日、あなたがわたしのもとを去って行くと、ベニヤミン領のツェルツァ...で二人の男に出会います...5 それから、...ギブア・エロヒムに向かいなさい (bw')。[行くで代用可]

(00) 歴下25：7 主はイスラエルの者、すなわちどのエフライム人とも共においでにならないからです。8 もし行くなら (bw')、単独で行って勇敢に戦いなさい。

(他に創24：41 出3：18⁽¹⁶⁾ サム上10：3 サム下14：3 エレ20：6, 34：3等)

(84b「来ル」の使用条件は'発話時あるいは到着時に到達点にいる動きの主体以外の対象に話し手の視点が接近している'であるが、bw'では'動きの主体以外の'という制限は必要でないと考えられる。先に見た通り、英語や日本語とは異なり、話し手・聞き手の位置 (Speaker-Addressee deixis) よりも bw' と hlk のアスペクトに関する特徴が両者の使い分けにより大きな役割を果たしているのである。

(ii b) 今 (ii a) で見たように Speaker-Addressee deixis は bw', hlk の使い分けには、英語・日本語ほど有意義ではない。これまでの考察に照らして用例を眺めてみると hlk にはやはり [Source-oriented], [Neutral] の特徴が顕著である。¹《to》, 'd《up to, as far as》 ([egressive]) との統合例は bw' に比べ遥かに少ないのに対し, 'm《with》, b《in》 ([comitative], [locative]) との統合は hlk の方に多く見られる。

(10) 創28:15, 歴上17:8 bkl ašr-*tlk*

あなたがどこへ行くにも

(11) 民10:32 whjh kj-*tlk* 'mnw

もしあなたが一緒においでくださるなら

(12) 民22:12 l' *tlk* 'mhm

あなたは彼らと一緒に行ってはならない

(13) エゼ5:7, (11:12) bhqwtj (bhqj) l' *hlktm*

お前たちはわたしの掟に従って歩まず

bw' にもやや比喩的な「神に逆らう者の道を歩くな」(箴4:14), 「怒りやすい者の友になるな」(箴22:24)の如き例も見られる。拙稿ではほとんど触れなかったこうした比喩的用法(bw' の使われる《同衾スル》, 《攻撃スル》, hlk の《死ヌ》, 《従ウ》など)もなんらかの形でアスペクトの差異から生じた転用であると推測される。

7.

以上、インフォーマルな記述に終始したが、テキストを読んでいると漠然と感じられていた二つの動詞の差異が今回の調査により少しくなりとも概念的に認識されたと考えた。

日本語来ル・行ク, 英語 come・go などと異なりヘブライ語 bw'・hlk の使い分けには Speaker-Addressee deixis よりも両者のアスペクトに関する本来的な特性の違いが大きく寄与していると思われる。両者の注目する相に次の

ような差異が認められる。

(14)	相	始動	継続	終結
bw'		○	○	●
hlk		●	●	○

これは動きに関して hlk の方が一般的であり bw' は特に終結相に注目する動詞であるという意味である。bw' が積極的に [terminative] と指定されるがゆえに hlk が [inceptive] あるいは [neutral] という性格を帯びるものと思われる。

両者のこのアスペクトの点での差異は古典アラビア語などに見られる Perfective/Imperfective の差異に通じるものがあるという気がする。realis/irrealis という共通点である。今回調査した中で bw' 1・2 人称完了形（二重の意味での realis）には否定辞を伴うのは僅か一例（申12：9 主が与えられる安住の地、嗣業の土地にあなたたちはまだ入っていないが、...）であった。

今後は、同一語根（BW', HLK）からの派生動詞等を含めた動作動詞一般の考察へと展開させてみたいと思っている。

（1987年10月28日）

註

- (1) K.ELLIGER & W. RUDOLPH 編 *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, 1967/77, Stuttgart 1984. をテキストとして用いた。ヘブライ語の表記はヘブライ文字による表記を転字して(子音のみで)表す。
- (2) 「旧約聖書」の各書の名称は、片仮名のものは初めの二字、漢字のものは最初の一字をとって略号とする。章節はすべて上記 BHS による。翻訳は日本聖書協会の新共同訳（1987）（一部1955年改訳版）によった。*The New English Bible* (*The British and Foreign Bible Society* 1972), *Die Bibel in heutigem Deutsch* (*Deutsche Bibelgesellschaft* 1982), *La Sainte Bible* (*Société Biblique Française* 1978) も参照した。
- (3) 「ここに」は発話の場所を示す。地図上の地点を指してなら「ここに行け」と言える。(Fillmore(1972)参照)。

- (4) 服部四郎 (1968) 「意味」『岩波講座 哲学 XI, 言語』p. 305. 参照。
- (5) Jenni (THAT と略, 参考文献を参照) に拠れば, bw' は 'mr 《sagen》, hjh 《sein》, 'sh 《tun, machen》, に次いで 4 番目の頻度, hlk はその後 ntn 《geben》 に次ぎ 6 番目の頻度。
- (6) *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, 1907 (repr. 1957), Oxford University Press.
- (7) 神については anthropolomorphism と考える。
- (8) 久野 (1978) を参照。
- (9) Fillmore, 上掲論文, p. 15.
- (10) CLARK, E. (1974) NORMAL STATES AND EVALUATIVE VIEWPOINTS, *Language* 50 : 2, pp. 316-332. 参照。
- (11) 九州大学言語学研究室尾形佳助氏 (佐賀県北方町出身) の報告。
- (12) THAT, PP. 488-489. 参照。"Auch die Imperativformen *lēk*, *l°kā* und *l°kū*, werden neben der Verwendung zum Ausdruck des reinen Befehls sehr häufig zur Verstärkung einer Aufforderung in Verbindung mit einem anderen Verbum benützt und können dann zumeist mit »auf ! wohlan ! « übersetzt werden (Gen 37, 13.20 ; Ex 4, 19 u.ö.). Hierbei ist *l°kā* oft » zur Interjektion erstarrt und läßt sich als solche auch an ein Fem., Gn 19, 32, oder an mehrere Personen, Gn 31, 44, richten «"
- (13) 例えば, 「久美子は 3 時にはまだここに来ていなかった」の「3 時」や, 「明日の正午までに来てください」の「明日の正午」が言及時。詳しくは, H, Reichenbach (1947) *Elements of Symbolic Logic*, Ch. VII. にあたられたい。
- (14) 民22 : 12 神はバラムに言われた。「あなたは彼らと一緒に行って (hlk) はならない…」も参照。
- (15) 松田伊作教授 1987年度前期特殊講義「セム語概説」の配布プリントによる。
- (16) 話し手が "神" の場合については上述の(10)に関する記述を参照。

参 考 文 献

- FILLMORE, C. (1972) "How to know Whether You're Coming or Going," *Descriptive and Applied Linguistics* 5, Tokyo, I. C. U., pp. 3-17.
- JENNI, E. (hrsg.) (1971) *Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament*, Bd. 1, München, Chr. Kaiser Verlag.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』 東京 大修館書店

松田伊作 (1972) 「古代文献語の意味考察—ヘブライ語—動詞群について—」

『現代言語学』 pp. 299-311 東京 三省堂

大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究——主観性をめぐって』 東京 南雲堂

A Semantic Study of Biblical Hebrew Verbs *bw'* and *hlk*.

Two Biblical Hebrew verbs of locomotion, *bw'* and *hlk*, rough equivalents of English *come* and *go*, Japanese *kuru* and *iku*, respectively, are examined with particular reference to their deictic uses.

The corpus being a written text, namely the Old Testament, native speaker introspection is by no means available. I will confine myself hence to the investigation of the linguistic and textual context.

The following is what I have observed in the course of the project.

(i) As to its basic use *bw'* could be specified [terminative]. That is, it denotes the act of locomotion in terms of its termination.

(ii) *hlk*, on the other hand, could be specified [inceptive] (i.e. the focus is on the departure) or [neutral] (neutral, with respect to two possible orientations of the starting point and the ending point).

This goes to show that the inherent aspectual distinction between the two is similar to that between their English counterparts as observed by Fillmore (1972).

As far as these two verbs of Biblical Hebrew are concerned, however, the aspectual distinction plays a more important role than the Speaker-Addressee deixis in choosing one over the other. The reverse might be said to be true of the English and Japanese verbs.

Lastly, I am led to suspect that this inherent aspectual distinction between *bw'* and *hlk* might correspond to the Perfective/Imperfective distinction characteristic of Semitic.